

安保・戦争国会粉碎へ!

2015年5月11日
No.291

Tel 03-3651-4861
mail_cn001@zengakuren.jp
http://www.zengakuren.jp/

全学連(斎藤郁真委員長) 書記局通信

5月沖縄闘争ー6/15国会デモへ 広島大の学友からのアピール!

【1】全世界的なゼネスト情勢の成熟

世界はゼネスト情勢だ! 韓国では4・24ゼネストが26万9000人の規模で爆発した! アメリカで、中国で、トルコで、全世界で新自由主義とその下での戦争と対決する決起が続いている! 日本でも、沖縄を先頭としてゼネスト情勢だ。米軍基地への怒りが大爆発し、本当に基地をなくす行動=ゼネストが求められている。ゼネスト情勢を、本物のゼネストに爆発させる行動を、全労働者階級の要求として、巻き起こしていこう!

「恐慌の中の恐慌」と言われているとおり、今の資本主義社会の命脈は尽きている。日銀の国家予算規模の異次元緩和、年金にさえも手を出してなんとか演出されている株高のみが支えのアベノミクスは、これから一気に崩壊する。この「恐慌の中の恐慌」の下で、「896自治体の消滅」が叫ばれている。要するに、資本主義はもはや社会を成り立たせることができないうところまで行き着いているということ。資本家階級はこの社会の崩壊をも受けて、「集中と選択」を叫び、社会丸ごとの民営化を進めようとしている。

民営化と同時に、彼らはこの資本主義を延命させるための唯一の手段=戦争に突き進もうとしている。安倍政権は、集団的自衛権の閣議決定、日米ガイドライン改定を国会を飛び越えて行い、これから戦争法案の提出、70年談話、憲法破壊を進めようとしている。国会は戦争さえ止めることのできない「おしゃべり小屋」にすぎないことが、ますます誰の目にも明らかになっている。民営

化・非正規化を推し進め、若者の5割が非正規、3万人が自殺するこんな生きられない社会、国を「守る」ために戦争する!? ふざけるなということだ!

大学はまさに、この社会丸ごとの民営化と戦争が進められている焦点だ。安倍政権の下での「大学改革」は、「第二の国鉄分割・民営化」と一体の攻撃だ。04年の国立大学法人化以降の交付金削減による支配をさらに推し進めるものとして、大学を3分類してその下で競争的に交付金を割り当てるとしている。また、「スーパーグローバル大学」攻撃もまた、競争的資金で「大学改革」を推し進める圧力となっている。クォーター制や年棒制、世界ランキングTOP100になることしか考えていない評価制度の導入…、「グローバル化」「教育の拡充」を言いつつ、学生の主体性を破壊する大学のあり方。民営化の下での安全破壊と同じだ。新自由主義は共同性を体現するはずの教育・公共部門から破壊する。戦争協力は大学において具体的に進められている。東大の軍事研究の解禁、経済的徴兵制。沖縄が「非正規の島」にさせられ、基地労働者として戦争協力しなければまともに生きられないことと同じ問題として、軍事研究・経済的徴兵制の問題はある。

ゼネスト情勢とは、この社会丸ごとの民営化と戦争、まともな社会をもう用意できない資本主義社会、これに対して決然とした怒りと決起が続々と巻き起こっているということ! 韓国ゼネストは、国家権力がゼネストを「不法スト」として弾圧を大規模に構

戦争法案粉碎! 安倍たおせ!

〈6・15国会包囲大闘争〉

6月15日(月) 終日、国会デモや座り込み行動<予定>

〈5/16~18沖縄現地闘争〉

~辺野古新基地建設阻止! 全島ゼネストと連帯しよう!~

5月15日(金) 辺野古現地集会 ※先遣隊のみ参加

16日(土) 国際通りデモ、全国学生集会、「復帰」43年集会

17日(日) 沖縄県民大会(那覇市セルラースタジアム)に合流

18日(月) 沖縄大学で集会



えている中でハン・サンギョン委員長先頭に26万9000人、4・24ゼネストでは、権力はこの団結に指一本触れることができなかつた。

広島大学学生自治会3年目の闘いは、まさにこの民営化と戦争と対決し、ゼネスト情勢と一体で闘うことによって、広大学生のみならず、学生全体の主体性を取り戻す決定的な位置を持っている。

広島大学の立場は、民営化と戦争を推し進める三菱重工・佃和夫が経営協議会に加わっていることに象徴的に表されている。「大学改革」としては「スーパーグローバル大学」に選ばれたことをもって、全国的にも学生・教職員さえ無視した激しい新自由主義攻撃が進められている。「自由で平和なひとつの大学」を掲げつつ、いっさい改憲・戦争情勢に触れず、学生の主体性を踏みにじり、自治会弾圧を深める広島大学のあり方は、戦争協力大学以外の何もでもない。こうした大学のあり方に対して、広島大学学生自治会は昨年、福島連帯と戦争絶対反対の8・6ヒロシマ大行動を訴える執行部をうち立て、8割近い信任をかちとっている。今年はさらに、具体的に「戦争か革命か」を問う選挙戦にしよう！

「被爆70周年」の広島で闘う今年の8・6ヒロシマ大行動は、8月冒頭まで続けられると言われる安保国会と、安倍の70年談話を粉砕する位置を持っている。戦争情勢と対決する内容と行動が求められていることは、この間のキャンパス展開から明らかだ。つまり、学生自治会という拠点、全労働者階級の前衛である党の登場と訴えが求められている。広大には、学生自治会とマルクス主義学生同盟中核派・広大支部が、苦闘に次ぐ苦闘でうち立てられ維持されている！労働者階級の要請に真摯に応え、今こそ全世界の労働者とともに、社会を根底から変革する行動に立とう！

【2】広大で闘う決意と自治会建設を通じた飛躍

私が広大で闘うにあたって問われていたことは、自分個人の「幸せ」を選ぶか、団結を選ぶかということであった。少数でありながらも弾圧をはね返し、学生自治会再建という偉大な事業を成し遂げるといふ苦悩と決然さを前に、それを裏切って自らの「安寧」のために生きるのかということだった。人の苦悩を前に、それを見送って生きて、人間として生きられるのか、という思いだった。こうした中で、不十分さがあっても最終的には、団結を裏切ることはできない立場をとる決意をした。

ずっと考えてきたことは、「拠点大学」における闘いと存在の重要性だ。「学生自治会とは？」「革命党とは？」「マルクス主義の核心は？」——まったく分かっていないところ闘いは始まった。「キャンパスに拠点をどうつくっていくか」という議論は、ついていくのがやっとだった。そこから少しずつ、拠点建設の闘いとをともに担っていく中で、自己解放という考え方を身につけていったことが重要だった。これまで、危機を危機として訴え、展望を語るということまで、必要性から理解していた面が大きかった。しかしながら、広大支部で闘う中で、階級的労働運動と、その具体的な焦点となる拠点建設の持つ豊かさ、大学・国家のあり方さえのりこえて、労働者・学生の団結が社会を変えることができるという展望を自分自身がつかんでいくことができた。自己解放のための拠点であり、党であること。このことに確信を持つことができるようになった。これまでの、言ってしまうと「仲間がいなければお先真っ暗だ、どうしよう」というような敗北主義的だったところから、この自己解放の闘いのもとに仲間を獲得していくんだといえるものをつかんだ転換。これが大きかった。

【3】「労働者階級の前衛」としての革命党

とりわけ自分が分かっていなかったことで重要だと思ったことは、会議の重要性＝「会議とは空気を入れること」「内容・意義での一致と団結が重要」ということ。党細胞や闘争拠点がなく中での会議は、やはり「確認事項のための会議」となってしまうがちであり、会議のイメージはつかめなかつた。ここから、目の前の広大

文サ会議をどうやっていくべきか、という大衆的実的な必要性もあいまって、このことを理解していくことができた。「学生に分かってもらえないのではないか」ということがあるなら、なおさら内容・意義を出していく必要があるということ。「文量を減らしたほうが分かりやすい」とか、そんなことはやっぱりありえなかつた。そして、そうまでして訴えたいことは、空気の入るものであるに違いないこと。労働者階級が、つまり自分たち自身が社会を変える主人公だと確信を持てる内容であること。会議は重要。それは学生の前だけでなく、何より革命党の中で重要なのだということ。革命党は労働者階級の前衛であり、階級と別のところにあるものではない。党も階級の一部であり、最も先頭の部分で労働者階級の苦悩と不安、喜びと怒りを一身に受ける部分だということ。会議は労働者階級の前衛の会議であり、より深い一致が必要だということ。革命党での論議は、党のあり方を通じて全労働者階級のあり方を決める位置を持っており、このことを意識して会議に臨んでいきたい。そして、人への訴えは、何より自分への訴えである。学生大衆へ、革命党へ、自分へ、訴える内容は同じであるべきだ。そのために必要な「能力」も何もない。

【4】「必然の王国」から「自由の王国」へ

私自身は、もともと自分の家に友達を呼ぶことすら数えるほどしか経験のない人間であった。今、革命を訴えて、団結を呼びかけていることが不自然なくらい、そういうタイプだ。小さい頃にあつたいくつかの同級生とのいざこざや、親や弟との絶え間ないけんかの中で、人間が分かり合えるということにあこがれつつも信じることができない、という感じだった。心理学や言語の研究に惹かれていったのも、そういう中での選択だった。大学を選ぶということが競争原理の中で行われていることで、自らが生き残るためには他人を蹴落とす、この考え方が許せなかつた。しかしながら、そうしなければ生きること自体がままならないような中で、選択といえないような選択を行って、大学を“選んだ”ことを覚えている。

「生きるためには仕方ない」「生きるためには必然なんだ」——今の社会で、そういう諦めをしなければならないことが、人生のあり方を決める場面にこそ集中している。大学受験、就職活動、そして、戦争。この、経済的・全社会的に主体性を「必然的に」奪うあり方。この「必然」「諦め」と対決することを、「決起」というのではないか。今、この決起が全世界いたるところで爆発している。とりわけ、最も「諦め」が強制されているところで。

人生を丸ごと奪う戦争の中で、中東の労働者が、競争社会・異常な受験戦争でも有名な韓国であれだけの決起が起こっている。沖縄では基地、人と人との理解を暴力的日常的に分断する具体的なあり方を体現している、その基地から決起が始まろうとしている。「諦め」と対決し、主体的な選択を行っていく、その決断が陸続と起こっている。

私が広大で闘っていくという決断も、こうした労働者階級の選択と一体のものであつたと思っている。これまで選択らしい選択を行ってこれなかつた中での「選択」。自由の王国＝共産主義社会は、諦めを強制する必然の王国＝資本主義社会と対決し、主体的に生きようと立ち上がる膨大な人々によってうち立てられる。

世界中では、すでに多くの労働者階級が決起している。この社会に怒り、この選択の時を労働者が大勢、待ち望んでいる。分かり合えないと思った時は、なおさら内容を共有すればいい。もっとも共有して、一つの闘いをつくっていくことだ。革命党はこの資本主義社会が強制する諦めと対決し、決然とした決起を守り、全社会的なものにするためにある。そのために、私もともに闘う決意です。全国の学友のみなさん、5月沖縄闘争—6・15国会デモの爆発へ、団結を固めて突き進みましょう！